



四つ葉のクローバー

発行所

桐生厚生総合病院 中央検査部

責任者 伴 聡

理念 臨床検査の質的向上と信頼性の確保

2021 年 8 月 発行

新しくなった生化学・免疫学検査の分析装置をご紹介します

私たちの血液中には数多くの物質が存在しています。これらの物質は生活習慣や病気によって値が高くなったり低くなったりするので、血液を調べることで体の健康状態を確認することができます。また、今まで血液中に存在していなかった物質を検出することで細菌やウイルスに感染したことを調べることもできます。今号では今年3月に新しくなった分析装置をご紹介します。

多項目自動分析装置



TBA-FX8

(キヤノンメディカルシステムズ株式会社)
比色最大 2000 テスト/時
血液・尿・体液中のタンパク質、脂質、酵素、
電解質など生化学・免疫学項目あわせて 51
項目を測定しています。

全自動化学発光免疫測定装置



Alinity i

(アボットジャパン合同会社)
最大 200 テスト/時
感染症、腫瘍マーカー、ホルモンなど免疫
学項目 23 項目を測定しています。

検体前処理分注装置

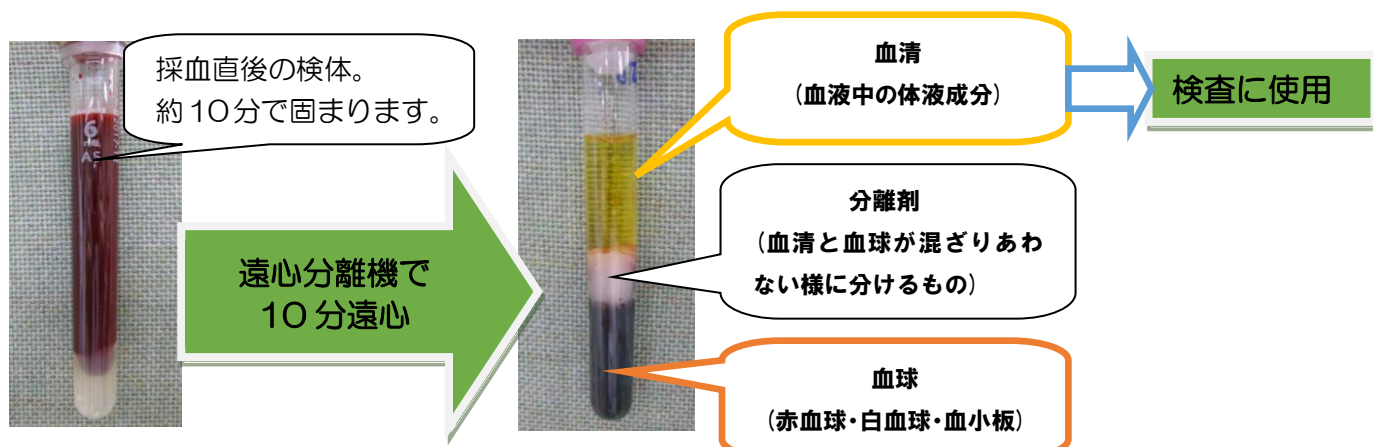


LabFLEX 2600G

(株式会社 日立製作所)
検体を分析装置ごとに分注、小分けして
検体処理にかかる時間を短縮させること
ができます。

採血後の検体はどのように検査をしているの？

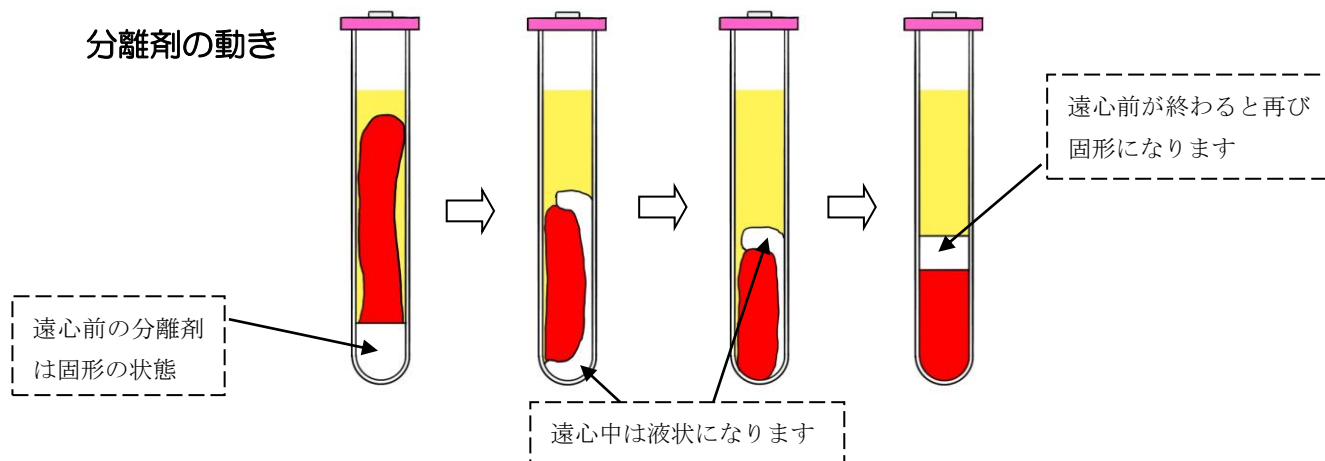
血液中には血球成分（有形成分）と血清成分（体液成分）が存在しています。生化学・免疫学検査では主に血清成分を使用して検査しています。



遠心分離の仕組み

血清成分と血球成分は重さ（比重）が異なるので、遠心分離機で約 3000 回転、10 分遠心すると両者を分けることができます。その際に約 1500G（G:ジーと読みます。）という重力の1500 倍の強い力がかかります。遠心後、採血管を逆さまにすると血清成分と血球成分は再び混ざり合ってしまうので、それを防ぐために採血管には“分離剤”という物質が入っています。

分離剤は通常は固形の“のり”の様な状態ですが、遠心によって強い力が加わると液状になり、遠心を止めると再び固くなる（チクソトロピー性）という不思議な性質を持っています。



日々の精度管理（機器から正確な結果が得られるかどうか確認試料を用いたチェック測定）やメンテナンス等、装置の管理もしっかり行い、迅速に正確な検査結果を臨床へ提供する為に努力しています。また、外部精度管理にも積極的に参加し、日本臨床衛生検査技師会精度保証施設認証も取得しており高い評価を得ています。



「四つ葉のクローバー」は当院のホームページ（インターネット）で公開しています。
ホームページは <https://www.kosei-hospital.kiryu.gunma.jp/>